

令和 5 年 5 月 20 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00060

研究課題名(和文) ジャйна教説話文学へのバクティ運動の影響と古グジャラート語文学の形成

研究課題名(英文) Bhakti and Jain Medieval Literature: the Formation of Old Gujarati Literature

研究代表者

山畑 倫志 (Yamahata, Tomoyuki)

北海道大学・高等教育推進機構・講師

研究者番号：00528234

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：3世紀から11世紀にかけて北インド西部で発展し多くの作品を生んだジャйна教文学は、12世紀頃にその内容や形式、言語を大きく変えた。しかし、その変化の要因については未だはっきりとはわかっていない。

本研究ではその要因の一つが、ジャйна教文学の中心ジャンルである聖者伝文学と、12世紀前後から北インド西部まで広がりを見せていたバクティ運動との相互関係にあると考え、実際の文学作品の分析を進めた。

研究成果としては、聖地文学、尊像崇拜儀礼、ジャйна教団の質的变化のそれぞれについて、バクティ運動を含めた当時の社会状況が影響していること、またクリシュナと関係の深いネーミナータの重要性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究による研究成果の学術的意義は、ジャйна教文学の変化の要因の明確化である。12世紀前後に生じたジャйна教文学の大きな変化について、同時期に北インドで広まりはじめた、クリシュナ信仰に基づくバクティ運動を含めた当時の大きな社会的変化が要因の一つであることを示した。

また社会的意義としては、南アジア地域において少数派であった時期が長かったジャйна教が、具体的にどのような経緯で共同体や教団を存続させてきたのか、その一端を明らかにすることができた。これは、南アジア地域の宗教的多様性の成り立ちの解明に寄与するものであり、また多様性を尊重する社会構築の具体的方策の検討にもつながるものである。

研究成果の概要(英文)：Jain literature, which developed in western North India between the 3rd and 11th centuries and produced many works, underwent significant changes in content, form, and language around the 12th century. However, the reasons for these changes are still unclear. In this research, one of the factors is assumed to be the interrelationship between the hagiographies, which is the central genre of Jain literature, and the Bhakti movement that spread to western North India from around the 12th century. We then proceeded to analyze the actual literary works.

The results of the study revealed the influence of the social conditions of the time, including the Bhakti movement, on the literature of sacred places, the rituals of veneration, and the qualitative changes in the Jain cult, as well as the importance of the Neminatha, which is closely related to Krishna.

研究分野：インド哲学

キーワード：ジャйна教文学 古グジャラート語文学 アパブランシャ語文学 聖者伝文学 バクティ 聖地信仰 尊像崇拜儀礼 ガツチャ

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、中期インド語文学と近代インド諸語文学の関係が未だ不明なことがある。それを明らかにするために重要な位置にあるのが北インド西部地域のジャイナ教徒による文学作品である。なぜなら4-12世紀においてこの地域のジャイナ教徒は複数の中期インド語を用いた文学活動を活発に行っており、また12世紀からは新しい文学形式や近代インド諸語の一つである古グジャラート語を採用するなど新たな要素の導入にも積極的だったためである。一方、15世紀以降はジャイナ教徒以外の手になるグジャラート語文学が英雄物ラーソーやバクティ文学として次々現れるが、このような文学活動の担い手や内容の変化は、文学作品がそれほど多く作られなかった空白の時期とも言える14世紀を経て起こっている。(図1参照)

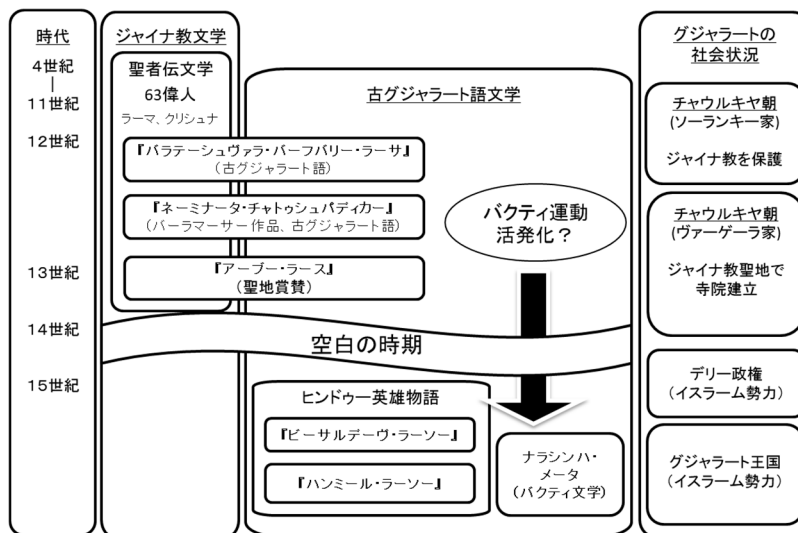


図1.北インド西部における文学活動の展開

以上の背景に基づき、本研究では学術的「問い」として中期インド語によるジャイナ教文学がどのような経緯を経て近代インド語による英雄物語やバクティ文学へと変わっていったのかを探った。特にクリシュナ信仰・バクティ運動とジャイナ教の関係を主たる要因として考え、また激変していた当時の政治状況の影響も考慮に加えて分析を進めた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、12世紀に始まるジャイナ教文学の大変化にはクリシュナ信仰に基づくバクティ運動が強く関係していると仮定し、ラーソーやバーラマーサーといった新形式の登場や、15世紀に現れるジャイナ教を背景に持たない英雄物ラーソーやバクティ文学へと至る要因を明らかにすることである。特に下記2点が目的となる。

(a) 中世ジャイナ教とクリシュナ信仰の關係に着目

ヒンドゥーの二大叙事詩である『マハーバーラタ』と『ラーマヤナ』の主要登場人物はクリシュナとラーマである。ジャイナ教説話でもこの二人は頻りにテーマとされ、特にラーマは聖者伝文学の中核を占めてきた。一方クリシュナはジャイナ教祖師のネーミナータの従兄弟として、あくまでも脇役として描かれ、ラーマと比較すると扱いが軽い。作品の量からラーマとクリシュナを比較すると、古い時代ではラーマ物語が優勢であった。しかし、12世紀以降の古グジャラート語文学作品をみると、ネーミナータ物語の体裁をとってはいても、クリシュナとラーマの物語に範をとったと思われる男女の別れを描いたバーラマーサーなどクリシュナ信仰の影響が見て取れる作品が現れる。その影響について詳細な研究はこれまでなかったが、中世ジャイナ教文学の多様な特徴の一部を明らかにする。

(b) 聖地と文学の結びつき

古聖典時代から聖者伝文学の時代にいたるまで、ジャイナ教における聖地の位置づけは観念的な色合いの濃いものであり、具体的な地名が出る場合でも、実際にそこに寺院などが建立された形跡はあまり残っていない。しかし、12世紀以降は聖地文学の作成と寺院の建立が期を同じくして増加していく。聖地信仰はジャイナ教独自の現象ではなく、当時のヒンドゥー社会でも見られるものであるため、バクティ運動との関係からその現象の説明を試みる。

3. 研究の方法

本研究の目的達成のための方法は3つの段階から構成される。まず、ジャイナ教文学及び古グジャラート語文学の諸作品へのクリシュナ信仰の影響の調査を行う。同時に、グジャラート・ラージャスターン地域におけるジャイナ教聖地の調査を実施し、聖地信仰の勃興がジャイナ教文学の変化と同じ要因によるものか検討する。特に、北インド西部の代表的なジャイナ教聖地であるギルナル山やシャトルンジャヤ山、アーブー山があるが、これらの聖地の主要寺院は11-12世紀以降に建立されたものが多い。最初期のジャイナ教聖地文学が書かれ始めるのも同時期である。それらの聖地文学をヒンドゥーのものと比較することにより、ジャイナ教における聖地信仰の導入経緯を明らかにする。

そしてそれらの成果をもとに12-15世紀の古グジャラート文学がバクティ運動の影響のもとどのような変化を経てきたのかについて明らかにする。

4. 研究成果

(1) ジャイナ教聖者伝の主要人物の変遷

ジャイナ教聖者伝の主要人物についての研究成果であるが、ジャイナ教の伝統的な63偉人からそこに含まれない人物へと主題が移り変わった時代の諸作品について、代表的な人物の取り上げられ方の変化を取り上げ、ジャイナ教団の質的変化との関係を論じた。

具体的には第22祖師ネーミナータの婚約者ラージマティー、大商人シャーリバドラ、転輪聖王の弟バラタを取り上げた。この三人の人物のうち、前二者はどちらも祖師や転輪聖王の関係者であるが、時代が下るにつれてより詳細な伝記の対象となり、シャーリバドラは王権をもしのぐ財力の持ち主として描かれる。どの人物も最終的には祖師の教えに従って出家するため、ジャイナ教の世俗に対する優越は確保されてはいるが、これら63偉人に含まれない人物たちは、当時の時代状況に応じた説話を生産するための役割を負わされていたと考えることができる。

(2) 聖者伝とジャイナ教団の関係

聖者伝とジャイナ教団の関係についての研究成果である。現在のグジャラート・ラージャスターン地域において活動していたジャイナ教団の初期の文学活動としてはヴィマラスーリ(1-5世紀)の『パウマチャリヤ』がある。それ以降、ジャイナ教文学は形式も洗練され長大な「チャリタ」形式が主流となる。だが、12世紀頃からチャリタに代わって比較的短い作品であるが、様々な内容を扱うラーソー、パーラマーサー、パーグ、プラバンダなどの多様な形式が登場し、使用言語がいわゆる古典的な言語から近代インド諸語にもつながる古グジャラート語へと移行していく。このような文学作品の傾向の変化には様々な要因があると考えられるが、今年度はジャイナ教団の性質の変化、名称としてはガナヤクラからガッチャへの変化を題材として、聖者伝文学の変化との関係を示した。

ここでは北インドのグジャラート地域に着目し、ギルナル山をはじめとした主要な聖地が信仰対象として発展する過程と、政治状況の移り変わりによって、ジャイナ教団が変化し、ジャイナ教文学が長大な聖者伝文学から、様々なテーマを扱い、形式は歌謡に近いラーソー文学やパーラマーサー文学に変化していくことを示した。

(3) ジャイナ教尊像崇拜儀礼とジャイナ教聖者伝説話の関係

まず、ジャイナ教で行われる尊像崇拜儀礼だが、これは寺院内に設置された祖師などの像を対象として行われる儀礼である。特にこの儀礼の対象となる像は24祖師の中でもリシャバやネーミ、パールシュヴァといった一部の祖師の像が多くを占める。このような尊像崇拜がジャイナ教の成立当初から存在していたのか、あるいは外部の宗教伝統から導入されたのかについては未だ判然とはしていない。ただ、文献上は5-7世紀頃まで遡ることが可能である。

一方、祖師をはじめジャイナ教の教義上重要な人物である63偉人を扱う聖者伝文学もその歴史的な展開は尊像崇拜儀礼の変化と一定程度対応していることが想定される。そこで聖者伝文学を検討した結果、尊像崇拜の儀礼を前提とした記述は初期ジャイナ教聖典から8-12世紀の聖者伝文学にも見られるが、尊像崇拜の具体的な記述が見られるのは聖地文学の流行する14世紀ごろからであることがわかった。そのため、尊像崇拜儀礼は古い時代から実施されてきたが、聖地巡礼の流行と同時期にジャイナ教の重要な儀礼として再定義されたと推測することができる。

(4) 9世紀におけるジャイナ教の組織であるガッチャとジャイナ教文学の変化

12世紀のジャイナ教の出家者であり、カラタラ・ガッチャの指導者であったジナダッタの著作と、12世紀以降のジャイナ教文学の変遷との関係を考察した。カラタラ・ガッチャの出家者たちは、当時の都市部寺院の出家者たちが聖典に基づいた生活をしていないことを非難しており、ジナダッタは、ジャイナ教徒としての正しい在り方を示すために、『ウパデーシャ・ラサーヤナ・ラーサ』などの著作を、当時ジャイナ教文学に用いられていたアパブランシャ語で書いた。だが、ジナダッタの作品は、聖者伝を主流とするジャイナ教のアパブランシャ語文学の伝統から見ると異質である。そこでこの研究では、ジナダッタの著作は、それまでの文学的伝統とはあまり関連がない一方、12世紀以降の文学動向と関係が強いことを指摘した。

(5) 17世紀のジャイナ教文学とアーナンドガン

17世紀のジャイナ教出家者であるアーナンドガンの活動とジャイナ教聖者伝文学について取り上げた。ジャイナ教白衣派の歴史の中でのアーナンドガンの位置づけを考えると、アーナンドガンが活躍したのは変化が比較的大きい時期にあたる。白衣派はそれまで、北インド西部に拠点を移し、クリシュナとラーマ信仰を取りこむ時期（紀元前1-9世紀）従来のジャイナ教団に対する改革運動の中で、複数のガッチャに再編され、聖地信仰が盛んとなった時期（10-13世紀）に大きな変化をしているが、この時期は聖像崇拜拒否やバクティ信仰などがジャイナ教内で問題化する時期（15-17世紀）にあたる。このような時代背景を踏まえた上で、アーナンドガンの著作が聖者伝の伝統から見てどのような特徴があるのかについて検討した。

(6) ジャイナ教を取り巻く社会状況の変化とジャイナ教文学

12世紀から13世紀にかけての古グジャラート文学作品の発生と流行について、従来プラークリット諸語による文学作品を担っていたジャイナ教徒たちが、グジャラート北部においてその活動を保護していた王権の縮小に応じて、より小規模な保護者が複数存在するグジャラート南部へと移動し、移動先地域の実態に適合した文学活動を行った可能性について論じた。

研究期間全体を通じて実施した研究の成果は、まず、ジャイナ教聖者伝の主要人物について、ジャイ代表的な人物の取り上げられ方の変化を取り上げ、ジャイナ教団の質的变化との関係を論じた。次に、聖者伝とジャイナ教団の関係についてはジャイナ教団の性質の変化、つまり新たな共同体である「ガッチャ」への変化を題材として、聖者伝文学の変化との関係を示した。また、ジャイナ教尊像崇拜儀礼について、尊像崇拜儀礼は古い時代から実施されてきたが、聖地巡礼の流行と同時期にジャイナ教の重要な儀礼として再定義されたと推測することができることを検討した。

そして、聖者伝については、北インドのグジャラート地域に着目し、ギルナール山などの主要な聖地が信仰対象として発展する過程の背景について検討した。政治状況の移り変わりによって、ジャイナ教団が変化し、ジャイナ教文学が長大な聖者伝文学から、様々なテーマを扱い、形式は歌謡に近いラーソー文学やバーラマーサー文学に変化していくことを示した。12-13世紀のジャイナ教聖者伝と14世紀以後の聖者伝との関係については、17世紀のジャイナ教出家者であるアーナンドガンの伝記を取り上げ、バクティ信仰や聖像崇拜拒否の運動の影響を受けながらも、聖者伝の伝統が引き継がれていることを示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 山畑倫志	4. 巻 71
2. 論文標題 ジャイナ教説話文献に見られる聖地と聖人の葬送儀礼の関係	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 942-938
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山畑倫志	4. 巻 70
2. 論文標題 ジナダッタの教団活動と聖者伝文学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 510-505
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4259/ibk.70.1_510	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山畑倫志	4. 巻 69
2. 論文標題 ジャイナ教の尊像崇拜儀礼と聖者伝説話	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 970-959
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4259/ibk.69.2_970	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山畑倫志	4. 巻 68
2. 論文標題 ジャイナ教チャリタ文学における主要人物の変遷とその背景	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 522-516
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4259/ibk.68.1_522	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Tomoyuki YAMAHATA
2. 発表標題 Carita and Raso: the Role of Bahubalin and Shalibhadra in the Jain Literature of the 12th and 13th Century
3. 学会等名 19th World Sanskrit Conference 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山畑倫志
2. 発表標題 ジャイナ教説話文献に見られる聖地と聖人の葬送儀礼の関係
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第73回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山畑倫志
2. 発表標題 ジナダッタの教団活動と聖地・聖者伝文学
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第72回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山畑倫志
2. 発表標題 ジャイナ教聖者伝と聖者アーナンドガン
3. 学会等名 2021年度 RINDAS総括シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山畑倫志
2. 発表標題 ジャイナ教の尊像崇拜儀礼と聖者伝説話
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第71回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山畑倫志
2. 発表標題 ジャイナ教チャリタ文学の変質とその背景
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第70回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山畑倫志
2. 発表標題 西部インドのジャイナ教におけるガッチャの形成と聖者崇拜
3. 学会等名 2019年度第2回RINDAS研究会「バクティズムの近世的展開に関する研究」(招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Tomoyuki YAMAHATA	4. 発行年 2022年
2. 出版社 The Center for South Asian Studies, Ryukoku Univerisity (RINDAS)	5. 総ページ数 33
3. 書名 Jain Hagiographies and Jain Community	

1. 著者名 山畑倫志	4. 発行年 2021年
2. 出版社 龍谷大学南アジア研究センター	5. 総ページ数 44
3. 書名 ジャイナ教聖者伝の展開とジャイナ教団	

1. 著者名 粟屋利江、太田信宏、水野善文編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京外国語大学拠点 南アジア研究センター	5. 総ページ数 425
3. 書名 言語別南アジア文学ガイドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------